Queensland Parliamentary Library 訪問記

－ オーストラリア クイーンズランド州議会図書館 －

甲 斐 愛 子

1998年2月3日12時、私はオーストラリアのブリスベンにあるクイーンズランド州議事堂の前にいた。ホストファミリーの紹介で州議会図書館を見学出来る様にアポイントメントを取っていてくれたからだ。市の中心部を流れるブリスベン川に面したこの議事堂の周囲は静かである。ちょっと厳めしい正面の入り口を入ると、右手横の受付けに中年の男性が2人私を見ていた。たどたどしい英語で来堂の理由とホトスファミリーの友人の名前を伝え連絡をとってもらう。その間に私の名前をチェックされ胸に見学許可のシールを張られた。待つこと10分堂々たる体格の女性が現れた。ライブラリアンのキャロル・スティンソンさんであった。圧倒される雰囲気に少し怖じ気づいたが、私の名前を言って挨拶をすると、やさしい言葉が帰って来てほっとする。

彼女の案内で議会職員の事務室を通りリフトで6階に上る。ずいぶん近代的だと思っていたら、ここは新しく増築された建物であった。この議事堂は旧館と新館とから成り私は新館の入り口から中に入ったのだ。

新館にある図書館は全て新しく、資料はコンピュータ化されオーディオビジュアル・ルームもそろっている。この部門には逐刊物が多く新聞・雑誌・各地方の出版物をセクション別に排列している。重要な資料はマイクロフィルムやマイクロフィッシュで保存しているという。議会図書館だから法律関係の資料が多く当然一般の図書は少い。利用出来るのは議員と職員に限られ、特別の許可があれば一般の人も利用出来るという。

新館から廊下を通り旧館に案内される。旧館に行く途中には中庭があり、まるでお城の様だ。1860年に建てられたこの議事堂はフランス・ルネッサンス調の荘厳な佇まいを見せている。廊下を渡り終ったところが議場であった。議場の赤い絨毯を踏み奥のMain Libraryに行く。高い天井まで届く書架と、歴史の重みを感じさせる書籍の数々、ほとんどが法律書で古くて痛みがひどいため、今順次補修をしているところだという。表紙に皮を使用したものが多く空調施設の無かった時代のため破損本が多いとのこと。“どうぞ手に取って”と言われたが触れると壊れそうなので外から見るだけにした。スティンソンさんの説明によるとこの中には世界でも珍しい本があり（それが何であるか、英語があまり早いので聞きもらしてしまった。）日本の学生が見に来たそうである。

Main Libraryを出て、旧館3階のオドノバン・コレクションの部屋に案内される。

オドノバン・コレクションとは1874年から1901年までクイーンズランド州議会図書館に勤めたライブラリアン、デニス・オドノバン氏のコレクションを集めたものである。彼の最大の功績は1860年から1900年の間に収集された州議会図書館のカタログを作成したことである。それは全3巻に及ぶという。

オドノバンカタログがいかなる資料であるか、オドノバン氏がいかなる経歴の人であったか、Queensland Parliamentary Libraryより出されている『The Constant Source』には次の様に記されている。

このカタログは著者の伝記のみではなく多くの件名標目からなり、同時代の学者達から世界でベストに入るカタログであると賞賛された。彼は図書館に招聘される前、アイルランドの学者であった。フランス語とイタリア語に通じ、大学で芸術と建築の講義を持っていた。彼自身は図書館の専門的経験は充分でなかったにもかかわらず図書館のツールについては卓越した能力を持ち、図書館の内容についてのいかなる質問にも答えられる準備をしていた。(概略)

機械化の進んだ現在ならいざ知らず、すべて人の手と人の能力で行われなければならなかった100年以上も前に20年の歳月をかけてカタログに取り組んだライブラリアンの業績は私には驚きのほかはない。残念ながら3巻のカタログは今外部に出されているそうで見ることは出来なかった。

彼女はランチタイムの間に私を案内してくださったので早々に引き揚げようと思っていたところ、ランチを一緒にしようと誘って頂いた。おそらくもう訪れることはあるまいと思いスティンソンさんの言葉に甘えてしまった。途中彼女の同僚と一緒になり3人で食事をすることになった。議事堂内にあるレストランはさほど広くない。利用する人が限られているせいであろう。セルフサービスで自分の好きなものを取る様になっている。メニューはあまり多くなく、サンドイッチ、ハンバーグ、サラダとオーストラリアではよくみかける食物である。

同僚の彼女は日本に行ったことがあるとかで、日本のこと私のことと矢つぎばやに質問して来る。語学力の無い私にとっては言葉を理解することに一生懸命でサンドイッチがなかなか口に入らない。日本は興味のあるところだから又行きたいという彼女の言葉を最後に時計を見ると、もう1時30分、すでに休憩時間は終っている。彼女達にお礼を言って席を立った。入る時は新館からであったが、出る時は旧館の議事堂正面の出入口に案内された。敷き詰められた赤い絨毯の階段を下りた。彼女達も外まで見送ってくれた。

気さくなスティンソンさん、そして彼女の同僚、共に何か気のおけない友人達に出会った、そんな感じであった。初めてお会いしたのに、そして外国の人なのに私には全く違和感は無かった。

クイーンズランド州議会図書館の訪問は思いがけないことから実現した。ホームスティ先での夕食の時、図書館の話をしていたところミセスの大学時代の同級生にライブラリアンがいる、ということから始まった。彼女の好意でスティンソンさんに出会うことが出来た。

私の質問に淀みなく答えてくれた彼女、何度となく“他に質問はないの”と促してくれた彼女、英語が充分であれば、あれもこれもと聞きたいことはたくさんあった。残念ながら私の英語は限られていた。絶えず笑みを浮かべ、私の問いに自信を持って答えてくれたスティンソンさん、それは彼女がライブラリアンとしての誇りを持って仕事に取り組んでいるからであろうか。(毎日通ったBrisbane City Library のライブラリアンと接した折りにも同じ様な思いをした。)

わずかな時間ではあったが、日本では感じられなかった何か、それは人間としての心の豊かさであったかもしれない。それは知識の豊かさであったかもしれない。もう一つ、それは私の憧れであったかもしれない。それが何か、私にははっきりとした回答を出せないままQueensland Parliamentary Library を後にした。

(かい　あいこ)